

# 金属を通して歴史を観る

## 16. 鎌倉の大仏と宋銭

新井 宏

日本金属工業(株)顧問

奈良東大寺の大仏開眼供養の天平勝宝4年(752)から、ちょうど500年目にあたる建長4年(1252)、鎌倉の深沢里で金銅八丈の釈迦如来像の鑄造が始まった。現在の高徳院にある鎌倉大仏である。東大寺の大仏が「国銅を尽して」しまっただけで、その後銅産は停滞してしまい、等身大以上の金銅仏は全く造られていなかった。半ミレニアムぶりの異例のできごとである。熟銅の価格は、平安時代を引き継いで、相変わらず異常なほどの高値状態を続けている。

そのような中での、金銅大仏の鑄造である。いかなる政治的、経済的、技術的な理由があったのであろうか。

### 銅不足で遅れた金銅大仏

残念ながら、鎌倉大仏の創建過程については、東大寺の場合に比較して、まったく謎にまつまれていると言ってしまう。

源頼朝が鎌倉に幕府を開いたのが、建久3年(1192)である。その少し前の文治元年(1185)には、平重盛の焼討ちに遭った東大寺大仏の修復鑄造が、宋の陳和卿の指導でおこなわれている。おそらく鎌倉大仏の鑄造技術は、その東大寺大仏の修復鑄造から学んだものであったであろう。

問題は政治的・経済的側面である。東国に幕府を開いた頼朝が、西国に対抗して、鎌倉にも大仏をと望んだとしても、至極当然なことである。焼討ちされた東大寺の修復に協力を惜しまなかった頼朝である。自らの政権理念の具現化をするためにも、権力の象徴となり得る大仏鑄造を望まなかったはずがない。

しかし、なげなしの銅を東大寺大仏の修復に使ってしまった後であり、金銅の大仏を造ることなど許され

る状況ではなかった。それなら木像でとの構想もあったかも知れないが、再建成った奈良大仏を意識すると、ためらいがあったに違いない。そのうちに、北条執権の時代になってしまい、幕府としての、大仏に対する執着心は薄れてしまったのではなからうか。

ところが、承久の乱を経て武家政権を確立した北条氏が、再び大仏建立への意を動かす。ちょうどその頃、鎌倉仏教の勃興期でもあった。

### 最初は木造大仏

最初に造られたのは木造の大仏である。僧浄光の企てにより、深沢里の地に大仏堂の造営が始められたのが嘉禎4年(1238)で、寛元元年(1243)には八丈の阿弥陀如来像ができ上がり、開眼供養がおこなわれている。しかし何らかの理由で木造大仏は倒壊してしまった。宝治元年(1247)の台風のためらしい。そのため今度こそは、災害にも耐え得る金銅の大仏を造ろうとなったのが鎌倉大仏である。そんな状況が、現在までに想定されている経過である。

遠江の僧浄光は、延応元年(1239)には、東大寺の時の行基の故智にならい、人別一文銭の勧進を北陸や西国に下知さるべく幕府に願ひ出ている。そのことからすると、工事が幕府の直轄でおこなわれたわけでもなさそうであるが、幕府は人倫売買銭や僧徒から没収した刀剣を大仏に施入するなど、かなりの援助を与えている。

短期間のうちに、まず木造の大仏が造られ、続いて金銅の大仏が造られたため、その相互関係を巡って、いろいろと論じられている。その中でも鑄造技術との関連で注目されるのが、木像原型説である。わずか数

年を経て、同じ大きさの釈迦如来が造られたわけであるから、木像大仏は最初から鑄造用の原型だったのではないかとする説さえがある。また倒壊した木像を再構成して鑄造用の原型として使用したとする説もある。

それは昭和34年からおこなわれた修理工事で、鑄造技術の実態が詳細に調査され、内側に鑄張りがあり、表型ばかりでなく、原型(中子)側にも割り型が使用されていることが明らかにされたからである。もっとも、木像の原型では大仏の持っている流麗さが出せないとか、技術的には塑土型によっても割り型が可能であるとか、一体の塑土型でも湯圧の関係で鑄張り状のものが出るので鑄張りが木像原型の証拠にはなり得ないとかの意見もあり、塑土原型説も未だ有力である。

これらの諸説については前々回の「世界最大の青銅像」の項でも若干紹介したので再論しないが、筆者の歴史を学ぶ技術者としての直感、木像原型説である。

## 木造大仏は金銅像の原型か

筆者がそのこととの関連で注目しているのは、僧浄光が延応元年の時点で人別一文銭の勸進を幕府に願出ていることである。もちろん普通の理解は資金集めである。しかし鎌倉大仏の場合は、資金集めと言うよりは、文字どおり銅素材としての銭集めであった可能性もあるのである。もし、そうであるなら、木像大仏完成の4年も前に、銅銭集めを開始していることになり、始めから金銅大仏を意図していた可能性が高くなるからである。

この一文銭勸進を伝える一条家本『古今集秘抄』裏書文書には、「男女四十五億八萬九千六百五十九人也、男十九億九萬四千八百二十八口、女廿五億九萬四千八百三十一口也」とあり、割書きとして、四萬貫五百貫八十貫九貫とある。当時の億は10万のことであり、若干計算が合わないところもあるが、要はひとり当り一文の勸進で四萬貫余りの銭になるとの意味である。後述するように、鎌倉大仏鑄造に、もし銅銭が使用されたとするならば、ちょうど四萬貫程度の銅銭が必要である。偶然の一致と、見過ごすことができないのである。

もっとも、筆者案の最大の難点は、大仏堂の建設が先に始まっていたことにある。筆者案が成り立つためには、大仏堂は雨除け用の仮設堂でなければならない。そのことに関連して、仁治3年(1242)秋、『東関記行』の作者が大仏を参詣した際に「その功すでに三が二に及ぶ。烏瑟たかく現れて半天の雲に入り、白毫あらたにみがきて満月の光をかがやかす。仏はすなわち兩三

年の功すみやかに成り、堂は又十二楼の構へ望むに高し」と、工事が三分の二ほど進んでいる様子を伝えているが、これをどう理解すべきであろうか。大仏像は完成しているが、建物は未完成で、未だ大仏は露座にあったとも読みとれる。それならば大仏堂は後に本堂に転換できるような仮設堂として工夫されていたのではなかろうか。

## 異常に安かった宋銭を原料に

鎌倉大仏の原料には、宋銭を鑄潰して使用したとするのは、すでに定説と言ってもよいであろう。それは鎌倉大仏の銅の組成が、鉛分を20%前後含み、錫が10%弱で、宋銭の組成に極めて似ているからである。念のため、表15にその状況をまとめておく。なお、宋銭分析値は、佐野有司氏らの資料によっているが、日本での通用量の多い銭種を上位から選び、模鑄銭と思われるものを除外した平均値で示している。『宋史』食貨志銭幣によれば、天禧3年の北宋銭の組成比は、銅3斤10両、鉛1斤8両、錫8両、すなわち、銅64%、鉛26%、錫9%である。別々に原料を配合している様子がわかって面白いが、文献史料の価が、実際の組成と極めて近くなっていることに驚きを感じる。

表15 鎌倉大仏と宋銭の分析値比較(%)

名称	部位/銭種	Cu	Sn	Pb	Fe
鎌倉大仏	螺髪	68.07	8.64	22.06	0.13
	螺髪吊環	69.03	8.81	20.88	0.10
	螺髪湯口	64.30	5.70	18.98	0.01
	右耳の後	68.41	8.72	22.07	0.07
	右耳の下	66.85	11.79	20.06	0.03
	胴部	70.96	10.15	13.62	0.01
	胴部鑄張	67.40	14.57	17.28	0.01
	胴部吊環	69.25	9.45	20.24	0.04
	膝部鑄張	73.99	6.12	19.29	0.03
	台座横	69.31	8.69	21.18	0.02
北宋銭の例	皇宋通宝(1039年)	66.0	6.7	26.0	0.02
	熙寧元宝(1068年)	72.1	9.9	17.4	0.01
	天祐通宝(1093年)	66.6	7.7	25.1	0.09
	天聖元宝(1023年)	70.3	9.6	19.6	0.05
	祥符元宝(1008年)	69.7	9.2	20.7	0.01

鎌倉大仏：『高德院国宝銅造阿弥陀如来座像修理工事報告』1961  
北宋銭例：佐野ほか「多変量解析法を用いる古銭の化学組成の研究」『古文化財の科学』28, 1983より。模鑄銭除く。

宋銭が使用された主因は、平安時代から鎌倉時代にかけて、日本における熟銅の価格が異常に高かったからである。第5回の「金属比価の歴史」の表4と表5を参照していただきたい。鎌倉時代の熟銅の価格は推定キログラムあたり900文である。宋銭の1文は1匁(3.75g)弱であるから、900文の宋銭は約3キログラムに相当する。熟銅とは異なり宋銭は安価な鉛を含んでいるとは言え、3分の1の価格である。これでは(日本産の)熟銅を使うはずがない。

物価あるいは通貨価値の比較は、簡単なようで結構ややこしい。マクロには米穀価で比較するのが良いが、異地域間の取引を問題にする場合にはしっくりしない。結局、米などよりも流通性の高い金か銀と比較するしかない。その視点で前出の表5を見ると、北宋後期の金価は200銭/gr、日本の平安末期から鎌倉時代にかけての金価は160~200銭/grとなっている。表にはないが、鎌倉大仏の造られた南宋末期の頃には、中国では金1両が銭40貫すなわち320銭/grにまで金高銭安が進んでいた。したがって日本における金の価格は、南宋の約半分である。それでは日本が金を輸出し銅銭を輸入するのは自然の流れである。事実この頃、日本の最大の輸出品は金であった。

鎌倉の大仏の重量は、120~125トンである。これはジャッキを使用して計測したと言うからかなり正確であろう。表面積と平均厚さと比重から求めた結果もほぼ一致している。

原料に銅銭を使うとしたら、歩留りを考慮しても4万貫文くらいあれば済む。鎌倉大仏の鑄造がおこなわれる直前の仁治3年(1242)に、西園寺公経が東福寺建立のために派遣した貿易船が、10万貫(375トン)の銭を持ち帰ったとの記録もある。また時期は異なるが、14世紀に元から高麗を経て日本に向かう途中で沈没した「新安沈船」から28トンの銭が見つかった例もある。輸入宋銭で鎌倉大仏の鑄造を賄ったことは十分に有り得たことなのである。

かくして、鎌倉大仏鑄造に宋銭が用いられたことは確実になったと言えよう。このことは、鎌倉時代の中期に至っても、日本における銅産が極めて低水準にあったことを改めて印象づける。

## 実体価値が保証した宋銭の流通

皇朝十二銭の壮大な実験に失敗して、銅銭が全く流通しなくなってから、中世になって再び銭が使われるようになった最初の例証は、久安6年(1150)橋行長が

私領を売り払った際の土地売券である。北宋が滅びてから24年目である。それ以降、急速に銭の使用が普及する。皇朝十二銭の場合とは逆に、朝廷は北宋銭の流通をしばしば禁止する。しばしば禁止したということは、禁止しても止まなかったことである。

それではなぜ中世になって銭の流通が復活したのであろうか。成書を見ると、要は経済の発展が銭を要求する水準に達したからで、絹・布・米などの現物通貨に比べ、利便性が評価されたからだと説明している。それはそのとおりである。しかしそれでは質問に対する回答にはなっていない。管見のかぎりでは、どうも筆者を満足させる説明がないのである。

筆者の意見を述べてみよう。それは当時の国際情勢から生まれたのである。

北宋が滅びたのは1126年であるが、それまでの166年間に2.6~3億貫文の宋銭を発行している。この中には、大銭(五銭や十銭の銅銭)や鉄銭もあったので、重量として3億貫(約100万トン)あるわけではないが、それでも膨大な量である。ところが、北宋は金により1126年に滅亡させられ、南宋(南朝)と金(北朝)に分かれる。金が北宋から持ち去った財貨は、開封だけでも、銭9870万貫、金120万両、銀6000万両あり、その他華北の諸州にもその倍に達する蓄積があったと言う。そのため金は自ら銭を発行する必要がなかったほどである。

しかし、金も南宋も、相互間の戦いで財政が逼迫し、交鈔という紙幣を発行するようになる。そのため、グレシャムの法則で、銭は退蔵されるか、あるいはより高い価値を求めて、激しく高麗や日本に流出するようになる。もっともその頃、高麗では銭の経済が発達した様子がないので、高麗に流れた分も、そのほとんどが日本に向かったようである。そのため1199年には南宋で銭の持出し禁止令がでていたほどである。

銅不足で銭が発行できなくなると、政府は紙幣を発行してしのごうとする。当初はそれなりの効果を発揮するが、紙幣は際限なく増刷される運命があり、必ずインフレが興る。その結果、グレシャムの法則で、銭は退蔵あるいは再溶解され、ますます銭不足すなわち銭荒を加速する。このようなたちごっこが実際に南宋で起っていたことを、淳祐8年(1248)監察使の陳求魯は、どこもかしこも、銅戸では銭を銅器に鑄直していると嘆いている。事実、近年のロシアにおいても、激しいインフレによってルーブルの価値が暴落し、ニッケル硬貨がステンレス鋼の原料として、密かに輸出

されてしまった例がある。歴史は繰り返されるのである。

その後、1234年に金を滅ぼした蒙古は、元を建国し、その強力な国家権力のもとで、世界で最初に、ほぼ完全な紙幣経済に移行してしまう。かくして、北宋時代には金1両の価格が銭10～20貫であったのが、13世紀中頃には、銭40貫以上というほどの金高銭安を生んでしまう。もちろんこの場合の銭は、紙幣化された銭で、実体の銭は退蔵化されたのである。

その頃、日本においては、国際的に見ても、米価との関係で見ても、金はかなり割安であった。中国における金高銭安と、日本における金安のもとで、宋銭の流入が起らないとしたら、その方が不思議である。当時の宋銭は、当時の日本の銅価よりもはるかに安価であり、商品として輸入しても十分に利があったのである。

すなわち、和同開珎や皇朝十二銭の時のように、地金価格が全く伴っていなかった銭に比べ、いざと言う時には、鋳潰せば十分に元の取れる宋銭の場合は、誰でも安心して受け取ることができたはずである。かくして、通貨の普及の最大条件が満たされた。それが日本で可能で、高麗で不可能だったのは、ひとえに日本で金の産出が盛んだったからである。

宋銭の輸入がさらに本格化するのには、13世紀の中程を過ぎてからである。元では、1260年に中統鈔という紙幣を発行し、宋銭は補助通貨の位置にさがってしまったのであるから当然であろう。

その頃、元寇があったが、民間の取引は相変わらず活発であった。日本は、若干のプレミアムを付ければ、好銭を選んで輸入できたに違いない。事実、地金価値のない大銭や鉄銭は全く日本に入っていない。日本は、中国とは全く別の通貨圏を構成していたのであり、宋銭を使って中国から商品を輸入することなど全くおこなわれていないのである。

このような宋銭の流入は、日本の銅産業に甚大な影響をもたらしたはずである。いわば原価を割った銅が、激しく流入したのであるから、産業として成り立ち行かなくなったに違いない。おそらく鎌倉時代に入り、相次いで発見された、備中喜多嘉太銅山、羽後太良鋳山、石見笹谷銅山なども、生産を一気に拡大するわけには行かなかったであろう。何の証拠もないが、このように考えるのが歴史を観る目である。

中世日本の銅生産が成長過程に入るのには、中国で明朝が始まった14世紀末からであろうと、筆者は考えて

いる。それは明朝が、銅銭を通貨として復活したからである。そうなれば今までのように、安価な銭を豊富に輸入することはできなくなり、結果として日本における銅産業の復活を促したに違いない。事実、日本で模鑄銭の製造がおこなわれ始めるのがこの頃からである。

中世の日本において通用した銭の大部分は、その200年も前に発行された北宋銭である。同時代の銭で通用したのは、明朝の洪武通宝と永楽通宝など明初のものだけである。それは明朝がせっかく復活した銅銭を再び禁じてしまったからである。しかも永楽通宝は、銅銭の通用を禁じてから発行された通貨で、明への臣従への報償として、足利義満のために造られた可能性さえあると言われているのである。そしてその後、洪武通宝の模鑄銭が大量に出まわるようになる。

## 奥州金で宋銭を輸入

さて、鎌倉大仏の話題に戻ろう。筆者の畏友相原精次氏は、著書『鎌倉史の謎』彩流社のなかで、なぜ源頼朝が、平家追討には弟たちを差し向けながら、奥州藤原征討には自ら出向いたのかを問題としている。それは頼朝政権が、西国よりも奥州を重視していた証拠だと言うのである。事実、鎌倉幕府成立の蔭の立役者文覚上人が、江ノ島で第1に祈ったのは、平家調伏ではなく、東北経営の成功であったという。文覚は、焼討ちにあった東大寺の復興に主要な役割を果たした怪僧である。その文覚や頼朝が狙ったものは何か。奥州の金に決まっている。

平清盛が福原に遷都までして進めようとした中国との貿易は、金の輸出と銭の輸入をベースにしていた。金がなければ何もできない。東国に金銅大仏を造ることなど、夢のまた夢である。そして頼朝はその政権基盤を固めるために金を求めて奥州に向かったのである。このように考えると歴史は鮮明に見えてくる。

そしてこれも相原氏の『鎌倉史の謎』によるが、『新編相模国風土記稿』には、正嘉2年(1258)の勝長寿院別当最信の伝本として、鎌倉大仏の高徳院を「天平九年三月、東国の総国分寺として聖武天皇の発願によって建立された」所と伝えている。

天平9年(737)は、国分寺建立の詔の出されるよりも4年も早く、まして総国分寺などあるはずもないから、この伝本は信用できないとするのが一般的であろう。しかし鎌倉時代の『元享釈書』も、天平九年三月の詔

---

に「国分寺の権輿」のことを伝えており、近年の学者の間でも「天平九年国分寺創建」説を唱えている方がいることを考慮すると、最信の伝本の内容は、かえって信頼できるようなにも思える。

そうであるなら、少なくとも鎌倉時代には、この鎌倉大仏が、総国分寺である東大寺と並んで東国総国分寺と称されていたことになり、そこに源頼朝の遺志を見ることができる。高德院には、目立たないが、東国

総国分寺の石柱もある。なお、相原氏は、頼朝が鎌倉に幕府を作る前の鎌倉史に光を当てて、じつにユニークな議論を展開しておられる。そのあたりについても触れたいが、本題ではないので割愛する。

最後になったが、最近出版された本に、馬淵和雄氏の『鎌倉大仏の中世史』がある。直接に参照することがなかったが、なかなか面白い本なので、本稿とあわせて読んでいただければ有難い。